

**01** 刊行物  
「シリーズ 横浜の遺跡」  
vol.2. 野島貝塚

横浜市内の遺跡を紹介するブックレット、シリーズ第2冊目は金沢区にある野島貝塚です。横浜の指定史跡かつ「野島式土器」の標式遺跡、かつ横浜最古の貝塚です。本邦初公開の資料も含め、内容を、カラー版小冊子にし、わかりやすくまとめました。

販売施設:  
【館内にて販売】 横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター  
横浜市歴史博物館、横浜市三段台考古館  
【通販】 横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センターホームページ

価 格: 1,000円(税込)

**02** 令和3・4年度  
小机城跡発掘調査成果報告会

◇日程: 令和5年12月2日(土) ※荒天時12月3日(日)  
◇時間: 10時~12時、13時~14時  
◇場所: 小机城跡(小机城址市民の森)  
◇申込: 不要  
◇費用: 無料  
◇主催: 横浜市教育委員会  
◇支援: (公財) 横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター

令和3・4年度に実施した小机城跡の発掘調査成果報告会について、調査した現地である小机城址市民の森にて開催します。  
発掘された中世小机城の端に思いをはせながら、いつもちょっと違う小机城跡を散策してみてください。

令和4年度調査 西曲輪東調査区



## — 横浜の旧石器遺跡 —

46

### ごんたつばら 権田原遺跡の礫群



横浜にはいつから人が暮らしていたのでしょうか。横浜の台地を厚く覆う赤土と言われるローム層の中に、は旧石器時代の人々の痕跡が残されています。横浜市内で旧石器時代の遺跡が多く確認されているのは都筑区内です。これは港北ニュータウンの建設に伴う発掘調査に伴い、一帯が全面的に調査されたからです。

写真は権田原遺跡から出土した旧石器時代の遺物の出土状況です。この遺跡は港北ニュータウン建設に伴う調査でみつかっています。石器集中と礫群が共に見つかることも多くあり、礫の中には焼けているものも多くみられます。こうした熱を受けて変色したり、火を受けたために焼けてはじけてしまった痕跡をもつ河原石が集中する礫群は、調理の結果と考えられています。炭化物の集中も共に確認できます。

石器類やその破片、礫群、炭化物などは当時の人々の居住のあり方を示していると考えられています。小集団が短期間居住し、他へ移動するといった遊動生活を送っていたことが想像されます。

\* 権田原遺跡は2013年から2021年にわたり計5冊の報告書を刊行した。旧石器時代の報告に際しては『権田原遺跡Ⅰ』及び『権田原遺跡Ⅴ』に記載されている。

1 ~ 4 権田原遺跡礫群(横浜市都筑区)

1 1~3号ユニット ユニットとは石器類のまとまりのこと。3か所、石器がまとまっている様子が見て取れる。

2 C区礫群 磐の中で黒っぽくなっているのは火を受けたもの。

3 C区礫群剥ぎ取り作業の様子 発掘状況そのものを残すため、黄色い水糸のラインで区切り、下の土ごと礫を剥ぎ取る準備をしているところ。

4 1号ユニット 1号ユニットには、ナイフ形石器1点、搔器1点、削片類13点、3種類(1点、18点、10点)の計39点)が含まれる。

Thanks you!

紙面リニューアル  
次号より相当が変わります

皆さんにお手に取っていただけるような紙面づくりを目指し、本文はま32号より相当してきましたNです。2015年に相当を任せられた際には、どんな内容なら皆さんは喜んでもらえるかな、遺跡というものを身近に感じてもらえるかななど、自分なりに思考を巡らし、紙面づくりに励んできました。

埋蔵文化財センターは何をしているところかを開かれ、発掘調査をして、それを報告する仕事を」という、何とか遠い分野のように感じてしまう方も多いかと思います。しかし、皆さんの家も、もしかしたら「埋蔵文化財包蔵地」と言って道路内にありますかもしれません。家の前を古道が走っているかもしません。考古学の分野は実際に幅広く、周辺分野も含まれればそれは多岐にわたります。縄文時代や弥生時代、古墳時代といったものに限らず、意外に近くに考古学に関連したものがあります。そういうものの身近に感じてもらえるように、ある時は近代遺跡、ある時は古道、それから塚なども特集したりしてきました。ちょっとコアに、洋い所に手が届くような、そんな充実した冊子を目指してきました。

今後とも『埋文よこはま』を通して、少しでも遺跡を身近に感じていただけたり、興味を持ってもらえるきっかけになっていたければ幸いです。

編集N(浪形早季子)

YouTube チャンネルも開設しています!  
勾玉って  
なに?  
3DCG  
動画

X twitter #Yokohama\_Maibunで検索  
登録してね

**『埋蔵文化財センターのご案内』**

**利用案内**  
平日: 9~17時 (イベント時を除く)  
(団体利用: 事前申込)※区郷土資料室併設

**アクセス**  
JR根岸線「港南台」駅  
2番バス乗り場より神奈中バス「上郷ネオボリス」行きまたは「根岸駅」行きに乗車、「上郷ネオボリス」下車徒歩1分  
京浜急行線「金沢八景」駅  
金沢八景駅から3番乗り場より「上郷ネオボリス」行き、終点「上郷ネオボリス」下車徒歩1分または神奈中バス「大船駅」行きに乗車、「長倉町」下車徒歩7分  
JR線「大船」駅  
3番乗り場より神奈中バス「金沢八景駅」行きに乗車、「長倉町」下車徒歩7分

**埋蔵文化財センター**

横浜市ふるさと歴史財団  
埋蔵文化財センター  
〒247-0024 横浜市栄区野川里2-3-1  
TEL. 045-890-1155 /FAX. 045-891-1551  
<https://www.reihaku.city.yokohama.jp/maibun/>

**埋文よこはま 46**  
発行日 2023年11月30日  
編集・発行 (公財) 横浜市ふるさと歴史財団  
埋蔵文化財センター  
印 刷 株式会社ナデック

「埋文よこはま」は横浜市域で発掘調査された遺跡や出土した遺物を紹介する広報紙です。  
市内の学校・図書館・区役所などで入手することができます。  
バックナンバーについては埋文センターHPからもダウンロードが可能です。

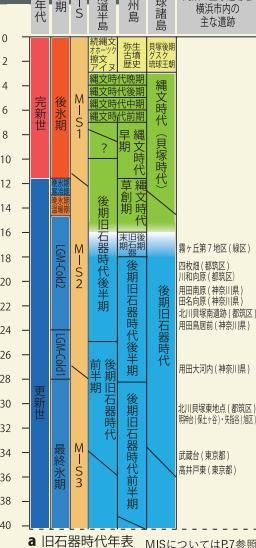


## 横浜市内で最も古い遺跡って？

日本列島では、現在、約4万年前から1万5000年前の後期旧石器時代の遺跡が約1万5千箇所近く存在することがわかっている。近年、4万年より以前の石器の出土事例がいくつも報告されているが、これらの石器群については慎重な議論がなされている。

横浜市内での最古の人間活動の痕跡は、保土ヶ谷区明神台遺跡や旭区矢指谷遺跡などから出土したナイフ形石器が最も古く位置づけられる。これらは約3万年前に降り積もった始良・丹沢火山灰層(AT層)が含まれるローム層下の黒色帯より出土しており、3万年より古い資料であると考えられている。

※1 日本国石器学会の集計したデータ(2010年)では旧石器時代の遺跡数は文化層ごとの合計で14500か所と報告されている。  
※2 4万年以前の遺跡は岩手県金取遺跡や島根県砂原遺跡をはじめ約60か所ほど報告されているが、ここでは言及しない。



a 旧石器時代年表 MISについてはP.7参照

神奈川県教育委員会所蔵・提供

b 明神台遺跡ナイフ形石器とその出土状況  
c 矢指谷遺跡B地区遺物出土状況 後の壁に黒色帯B3が見える  
※ローム層は火山灰の堆積層、明るいローム層(L)と黒色帯(B)といわれる暗いローム層が交互にみられる。

## 考古学と旧石器時代

日本に旧石器時代の文化が存在することをはじめて科学的に証明したのは1949年に行われた群馬県岩宿遺跡の発掘調査である。しかし、それ以前にも旧石器時代文化の追及は試みられている。中でもN.G.マンローが神奈川県内において、1905年夏に、早川・酒匂川流域で旧石器時代の遺物の探索を国内で初めて行ったことは有名である。

マンローは横浜市内の考古学を語る上では欠かせない人物である。旧石器時代の遺物探索年と同年の1905年秋には、神奈川区の三ツ沢貝塚を発見し調査を行っている。この発掘は7ヶ月という長期間の本格的発掘や初めてのトレンチ法による貝塚の発掘、分層発掘による時期的変化を追うなど、画期的なものであった。

マンローの早川・酒匂川流域での調査は数トンにも及ぶ礫の中から旧石器の可能性がある資料を抽出するとい

うがかりなものであった。こうして、礫層や礫層上の赤色粘土層から旧石器状の角礫を採集し、1911年(明治38)刊行の『Prehistoric Japan』で紹介している。マンローはこれらの角礫は河床で礫がぶつかり合ってできた可能性があるとしながらも、ヨーロッパやアメリカで発見されている粗雑な石器に類似するとして、人々が陸橋につけて渡ってきた可能性を指摘している。

しかし、当時の日本考古学会は縄文人の人種論争に明け暮れ、マンローの発言に耳を貸すような状況ではなかった。岩宿遺跡の発見前までは、発掘調査も縄文土器が出土する黒土層を掘り下げるが終了しており、その下の関東ローム層は活発な火山活動により人種が活動できない環境で堆積したものと考えられていた。

神奈川県内で旧石器時代の遺跡が最初に発見されたのは鎌倉市粟船山遺跡である。粟船山遺跡の石器は当時鎌倉学園考古学部に所属していた亀井幹雄により北鎌倉駅前にてみあげられたロームの土から黒曜石の小片が発見され、それを同校OBである吉崎昌一が気づき報告している。吉崎はのちに旧石器時代の考古学者として知られるようになる。

この数年前には、同校OBでもあり考古学部の創設者でもある宇野小四郎が岩宿遺跡の発見者として著名な相澤忠洋らと江ノ島で縄文時代早期の遺跡踏査をしている。相澤は幼少期鎌倉で過ごし、鎌倉に行く前、一時だけ横浜にも暮らしている。また戦時中には横須賀の武山海兵团に入団するなど神奈川県内と縁が深い。相澤が1946年に群馬県岩宿の関東ローム層から石器を発見し、ここに日本の旧石器時代研究が幕を開けるわけだが、それまでにこうした人々との交流があったことは考古学史を語る上で重要である。

※宇野については『埋文よこはま』43号参照



d-e 本郷遺跡(灘谷区)



f-g 出土地点・状況

d-e 「横浜市史」第1巻より転載



g 横浜市歴史博物館所蔵・展示

h-i 北川表の上遺跡 (i;第3,4,5ブロック, h;第7ブロック)

j 上の山遺跡 遺物集中

k 四枚畠遺跡 第3ブロック

l 川和原遺跡 1ブロック

m 豊屋の上遺跡 C区5号木炭集中

n 花見山遺跡 1号縄張

o-p 三の丸遺跡 (o;第2・第3ブロック p;剥片)

q-r 林遺跡 遺物出土状況

s 能見堂遺跡 C区e地点

t けんか山遺跡

## 横浜市内の旧石器時代遺跡

P.7地図参照



～コラム～

※宇野については『埋文よこはま』43号参照



## 地形から考える～旧石器人の痕跡～

旧石器時代のライフスタイルで現代の私たちと最も異なる点の一つが**遊動生活**をしていたことである。遊動生活というとモンゴルなどの遊牧生活を思い浮べるかもしれない。彼らは家畜と共に移動生活をしているが、家畜を持たない狩猟採集民の旧石器時代人の遊動生活とはどのようなものだっただろうか。例えば、民族例として、南部アフリカのカラハリ砂漠に住むブッシュマンは狩猟採集生活を送る。彼らはキャンプに一週間からせいぜい数週間程度滞在したのち、別のポイントに移動するといった遊動を繰り返す。

ヨーロッパの旧石器時代の人々はしばしば**洞窟**を利用する。岩陰に住んだり、洞窟の奥深くに入り込んで壁に絵を描いていることはよく知られている。日本でもこうした岩陰や洞窟を利用するが、それは縄文時代草創期や早期のものが多い。日本では旧石器時代の遺跡はたいてい洞窟や岩陰ではなく、普通の平野や台地にあるため、英語のオープンサイトを訳して**開地遺跡**と呼ばれる場所から見つかる。洞穴や岩陰の積極的な利用がみられない理

ヨーロッパと日本の洞窟遺跡の風景は全く異なり、狩猟対象の動物相の生息域も異なる。

a ピレタ洞窟(スペイン)  
(後期旧石器時代・新石器時代)  
内部にギギ、ウマ、シカ科、ウシ科等のほか、妊娠中の牝馬や魚と言われている洞窟壁画がある。



a

由の一つに、洞穴や岩陰、木陰などの自然地形に常に頼ると人々の行動に大きな制約が生じるためと考えられている。開地遺跡と言っても山の中の遺跡のイメージを持っている人もいるかもしれません。実際に横浜市内のどんなところから遺跡が見つかっているのだろうか。

横浜市域の地形は丘陵、台地、沖積低地そして人工的な埋立地から成る。八王子から連なる**多摩丘陵**は横浜市西部を南北に貫き、港南区あたりで円海山を形成する**三浦丘陵**につながる。丘陵の前面に形成され、頂部に広い平坦面を持つ標高40m程の小高い丘である台地は、東京湾側は**下末吉台地**、相模湾側は**相模野台地**と呼ばれる。下末吉は横浜市鶴見区の台地付近の地名である。低地は、河川沿い及び東京湾に面した標高の低い平坦な地形を持つ。

南関東では相模野台地や武蔵野台地に旧石器時代の遺跡が多い。神奈川県内では相模川の左岸に広がる東西約10km、南北約30kmを測る相模野台地にそのほとんどが分布する。横浜

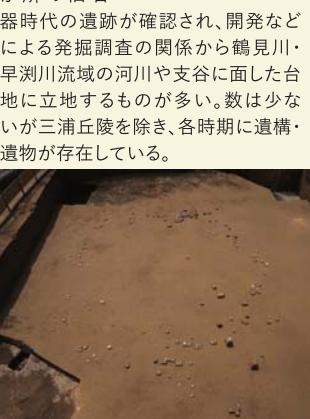
市域では、西端が相模野台地東端部にあたるが、東端を流れる境川及びその支流域に8遺跡が確認されるのみである。

横浜市内全域では59か所の旧石器時代の遺跡が確認され、開発などによる発掘調査の関係から鶴見川・早渕川流域の河川や支谷に面した台地に立地するものが多い。数は少ないが三浦丘陵を除き、各時期に遺構・遺物が存在している。



b

b 黒姫洞窟遺跡(新潟県) 標高約500m  
(縄文時代草創期・早期)  
破間川支流に流れ込む沢の右岸に形成。



c

### どんな暮らしをしていたの？～居住形態～

日本の旧石器時代の住居状遺構とみられるものは全国的にみてもわずか30軒ほどしかない。縄文時代によく見られる竪穴住居と呼ばれる半地下式の家の痕跡は旧石器時代ではほとんどみられず、大半は浅い掘り込みやピットが見つかるだけである。

旧石器時代の遺物のほぼ大半を占める石器は全国各地から発見される。これらは原石から自分たちにとって使いやすい道具とするわけだが、この製作に関わる作業を、常に屋外で行っていたとは考えづらい。また風雨や動物などの外敵などから身を守るために、木の枝などを組み、草や皮で覆った簡易な**テント式住居**を想定している研究者は多い。しかし、簡易であればあるほど、発掘調査で検出しづらい。

神奈川県相模原市の**田名向原遺跡**では、直径約10mの範囲に安山岩の礫が環状にめぐり、柱穴12本、炉址2基が検出された。内部では193点もの尖頭器が発見され、製作時に生じた破片等から尖頭器の製作が行われていたとみられている。

こうした数少ない住居と考えられる遺構もあくまで推定に過ぎず、日本列島における後期旧石器時代の居住形態は依然としてはっきりしない。この見つからない住居に対し、良く見つかるのは「**ブロック**」や「**ユニット**」と呼ばれる石器の集中分布である。これらは居住や生業行為の際の石器製作・使用などの証拠である。

c 横浜市内の地形と旧石器時代遺跡分布図

○ 旧石器遺跡  
■ 下末吉台地  
■ 多摩丘陵  
■ 相模野台地  
■ 三浦丘陵

d

d 住居の跡(相模原市田名向原遺跡)  
相模原市教育委員会所蔵・提供

e

### どんな暮らしをしていたの？～遠隔地との交流～

石器とは石で作られた道具である。旧石器時代の人々は食料となる動物の捕獲や調理、皮なめしをはじめとした様々な作業を石器を用いて行っていたため、石材資源の開発や獲得には非常に熱心であった。

日本列島の旧石器時代の材表的な石材は、**黒曜石**、チャート、珪質頁岩、サヌカイト、下呂石、ガラス質安山岩等がある。人々は様々な石の特性を理解し、例えは鋭い切れ味が必要なナイフ形石器には黒曜石などが好まれ、擦石にはこするのに好都合なアバタ状の表面を持つ礫が用いられた。

黒曜石は北海道から九州まで170



e

### どんな食べ物をたべていたの？

旧石器時代というと、ギャートルズのような大きな骨付きの肉を焼いて食べている、そんな生活を思い浮かべる人も多いかもしれない。では実際に人々はナウマンゾウのような大型哺乳類の肉ばかり食べていたのだろうか。おそらく答えは否である。しかし残念ながら日本の酸性土壤では有機質資料は残りづら、動物の骨などは地中に埋没している間に溶けてなくなってしまう。

神奈川県綾瀬市吉岡遺跡群C区では礫群の中からイノシシの乳歯が見つかっている。また北海道柏台1遺跡の炉跡からはシカ科の可能性のある焼骨片がみつかっている。植物質資料の出土も非常に少ないので、出土資料や周辺環境からオニグルミやチョウセンゴヨウやハシバミなどの実、コケモモやクロマメノキ、ヒメウスノキなどのベリー類を利用が想定され、植物質資料は南下するに従い豊富になる。

こうした数少ない住居と考えられる遺構もあくまで推定に過ぎず、日本列島における後期旧石器時代の居住形態は依然としてはっきりしない。この見つからない住居に対し、良く見つかるのは「**ブロック**」や「**ユニット**」と呼ばれる石器の集中分布である。これらは居住や生業行為の際の石器製作・使用などの証拠である。

吉岡遺跡群C地区出土の乳歯  
神奈川県教育委員会所蔵・提供

f

黒く見えるのが  
黒曜石質部



交流

以上の産地があり、それらは元素組成を測定し比較すれば分けられる。代表的な産地として、北海道の白滙、置戸、秋田県男鹿、山形県月山、栃木県高原山、長野県和田峠、東京都神津島、静岡県柏崎、島根県隠岐島、大分県島原越岳などがある。

南関東の旧石器石材は台地ごとに違いがあり、後期旧石器時代のなかでも時期によって黒曜石の産地は異なる。**天城・箱根系**、**信州系**、**神津島系**の石材が主に用いられる。和田峠と八ヶ岳の黒曜石は信州系と呼び、これらは南関東の下総・武藏野、相模野、愛鷹、箱根山麓、野尻湖周辺など約200km圏内にもたらされている。神津島産の黒曜石も南関東、愛鷹・箱根山麓などの沿岸部を中心に、信州などの内陸にまで約200km圏内に広がる。一方で、箱根山や柏崎産の天城箱根系黒曜石は愛鷹・箱根山麓から相模野・武藏野台地と約100km未満圏内とやや狭い。

神津島は今より海面が低下している旧石器時代でさえ、本州と陸続きにならず、神津島産の黒曜石の入手には海を渡るしかない。当時の人々は資源



g

獲得のため、航海というリスクを冒してまで、石材獲得に励んだのである。

e 三の丸遺跡出土の剥片と敲石

f 神津島砂糖山の黒曜石層 西澤文勝氏撮影・提供

g 霧ヶ丘遺跡第7地区出土の黒曜石製石器類



吉岡遺跡群C地区礫塊検出状況  
神奈川県教育委員会所蔵・提供

### 礫群って何？

有機質資料はほとんど残らない中で、当時の食生活を物語る重要な証拠が表紙でも紹介した礫群である。礫群とは石のまとまりであるが、その集中の在り方には密度の高いものとそうでないものがある。これらの礫は煤が付着していたり、火を受けて赤く色が変化していたり、ひび割れたりと、焼石であることが明らかである。これらは調理に用いられた、すなはち調理施設であった可能性が高いと考えられている石のまとまりなのである。

こうした焼石を使用して調理をする例はオセアニアなどの民族例にもみられる。石蒸し焼き料理やストーンボ

リングなどである。特に石蒸し焼き料理はイモ類を中心に蒸し焼き調理をすることから、これまで「焼く」という調理方法だけだったものが「蒸す」という調理が加わることにより、イモ類などのデンプン質食糧や硬い食物に対して十分火を通すことを可能にしたと考えられている。



5



食衣

落とし穴

旧石器時代人はどのようにして動物を捕獲していたのであろうか。ナウマンゾウのような大型哺乳類とシカなどの中型の動物たちでは当然その捕獲方法も異なっていただろう。

長野県野尻湖や茨城県霞ヶ浦に注ぐ花室川などではナウマンゾウを含めた大型動物の化石骨が出土する。こうした場所は当時、針葉樹林と広葉樹林の混じった開地の水場であり、旧石器時代人による集団的狩猟が想定される。開けた霞ヶ浦の方から小さな花室川渓谷などに追込んで捕獲していたのかもしれない。

一方で、三浦半島や静岡県、南九州などでは始良丹沢火山灰降灰前の土坑が見つかることがある。土坑のサイズは平均直径にして1.4m、深さも同じくらいである。形は円形であり、断面形状は逆台形である。これらは斜面であったり谷頭部分の等高線に沿って複数で列をなして発見されることが多く、土坑内からは石器などの遺物はほとんど出土しない。土坑の規模や形状も含め、これらは陥し穴とみられ、対象獣はシカなどの中型獣が考えられている。

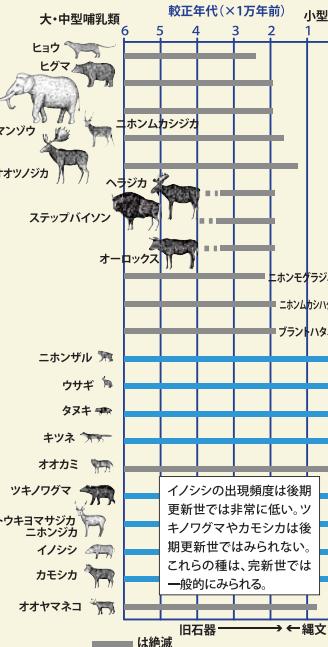
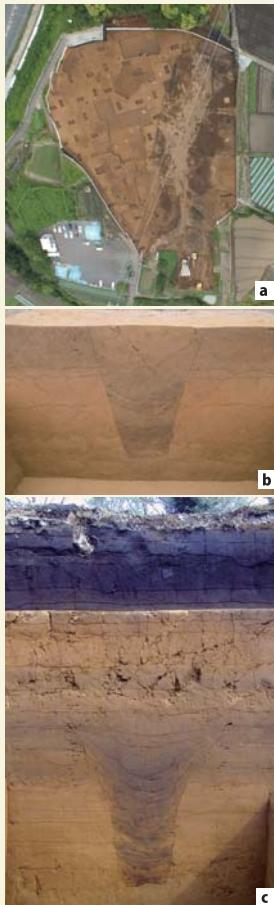
#### a・b 船久保遺跡(横須賀市)の陥し穴状土坑

神奈川県教育委員会提供

### 打木原遺跡(横須賀市)の陥し穴状土坑

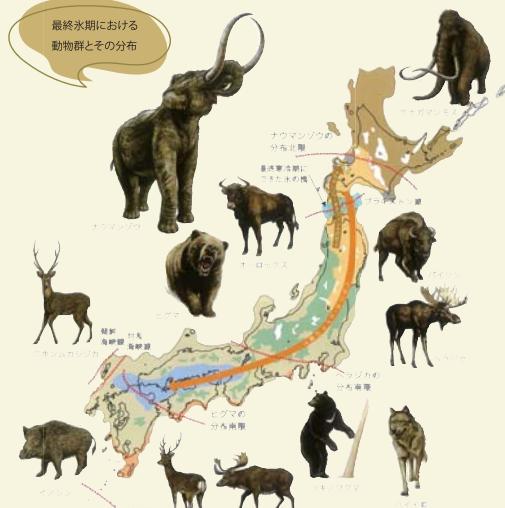
期における

—  
—



本州における後期更新世～完新世の哺乳類の絶滅  
春成秀重 2001「更新世末の大形獣の絶滅と人類」『国立歴史民俗博物館研究報告』第90集を改変

70万年以降に大陸と日本の中間が陸化して動物が渡ってきた時期は、凡そ63万年前と34万年前の少なくとも2回はあった。63万年前にできた陸域を渡り大陸からやってきた動物には、「ウツワウ、ニホンムカシザメ、スイギョウサイ、キタラ、クマ、ニホンザルなどがいた。34万年前にはナウマンゾウやオオツノジサミを中心とした動物群が大陸から渡ってきたと考えられてる。



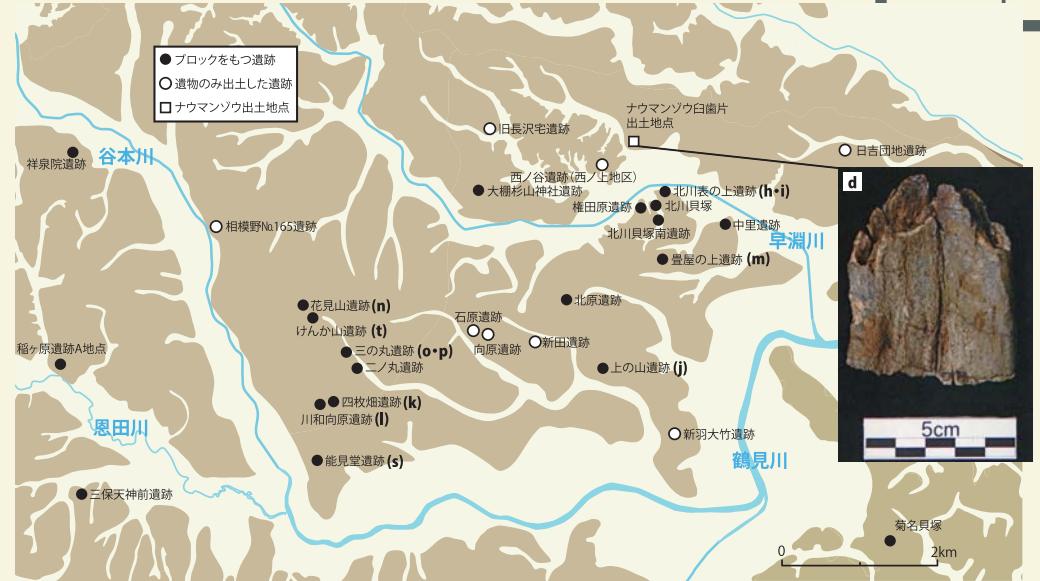
考古学が扱う時間的な守備範囲は人類が誕生してから現代までと、長期間に及ぶ。その一番最初の時代が本稿で紹介している旧石器時代である。日本列島で考古学を扱う場合、後期旧石器時代という、約4万年以降が守備範囲となる。その頃の日本列島ではナウマンゾウなどの大型獣がまだ生息している頃である。ナウマンゾウの最盛期は海洋酸素同位体(MIS)Stage5(前回氷期、12万年前がピーク)だが、絶滅はStage2(約28000年前～11700年前)であり、ナウマンゾウは當時の人々の狩猟対象獣であったと考えられている。オオツノジカにいたっては縄文時代まで生息している。

ではこうした現在は絶滅してしまった大型哺乳類、場合によってはやや化石化しているこれらの資料は、古生物学と考古学のどちらの分野が扱う学問なのだろうか。正解は「両方」である。考古学が対象とするのはヒトとの関係性である。当時の人々が肉であったり骨や皮などナウマンゾウの何かしらを利用し闊をもっていたら、ヒトの痕跡を探るために研究する。一方で過去の生物についての学問である古生物学では、ナウマンゾウの種の系統だったり、環境との相互作用などのメカニズムを追求する。ナウマンゾウの絶滅の要因は環境であったかも知れないし、人類活動が影響しているかも知れないし、その両方かもしれない。

考古学は様々な分野と共に成り立つ総合学ともいえる。各々の分野

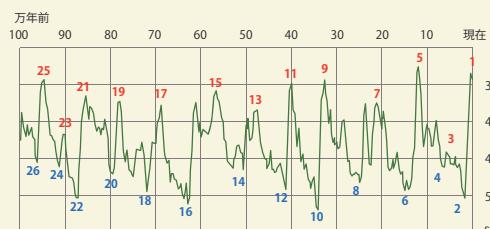


\*図中の記号はP.3の写真の記号に対応

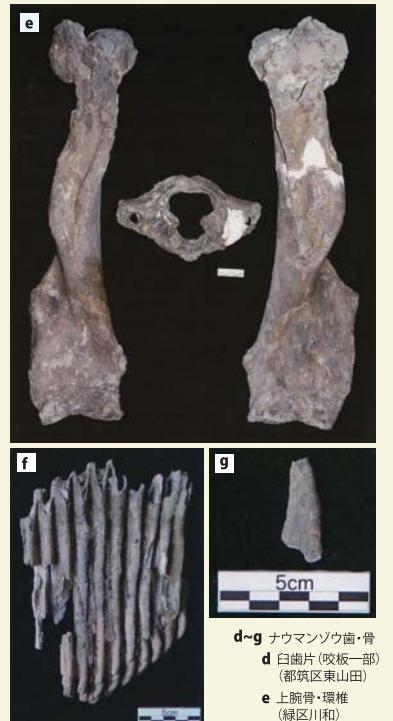


## 横浜市内の大型哺乳類化石出土一覧表

出土地	発見年・経緯 出土状況	種類	部位	出土層
港北区日吉2丁目 アパート西面		ニホンムカシジカ	頭蓋骨上部、角、肢骨	更新世後期前半 下末吉層
鶴見区鶴見川河口	1924	ナウマンゾウ	上顎右第2大臼歯	流木・クルミ・サイカチの 刺・昆蟲の羽含む砂層
鶴見川河口	1931年冬 砂の除去工事中	ナウマンゾウ	左下顎臼歯（前方破壊）	不明
鶴見区上末吉保山	1967	ナウマンゾウ	下顎左第2大臼歯	更新世後期前半 下末吉層
鶴見区上末吉町		ニホンムカシジカ	左角	更新世後期前半 下末吉層
鶴見区下末吉町 宝泉寺前崖	1968	ニホンムカシジカ	左角	更新世後期前半 下末吉層
鶴見区下末吉町 愛宕谷		ニホンムカシジカ	左角	更新世後期前半 下末吉層
港北区東山田町	1987/8/1 宅地造成工事現物	ナウマンゾウ	臼歯片（咬板一部）	TPテフラを削り込んだ谷を 埋めたたて堆積層（TPとAT の間に） 種類河岸段丘堆 積物の堆积より 3~4万年前（当時）
緑区川和町	宅地造成地内 約50m四方範囲に散乱	ナウマンゾウ	I節体分(運椎、左右上腕骨、 右桡骨、左手根骨、肋骨)	更新世中期 相模群サバン沼層 下部
中区新山下町	1961	ニホンムカシジカ	左大歯骨	新山下町層
西区洗足町字道分		シカ	角	第三紀層？
保土ヶ谷区東川島 保土ヶ谷市中央一丁目 東川島駅東側	1958年8月6日 東横線車内に見 出された車両現物（横浜 市都市計画道路整備計 2号線銀羽地区）	ナウマンゾウ	臼歯片	更新世 上部原生上部相当層 下末吉層下部層 これらは混含して複数層 1m以上の構築片を多く含む 河成砂礫層
南区永田2丁目	1970年 個人生駒駐車場工事中	ナウマンゾウ	右上顎第3大臼歯（破壊）	更新世後期前半 下末吉層
南区大岡町		ナウマンゾウ	切歯・臼歯	砂礫層の泥炭質土層
南区六ツ川	1913 1970年再発見	トカラヨウゾウ (スコゴドンソウ)	上顎第3大臼歯	更新世中期 明治ヶ浦層
戸塚区小雀町堤場	1929	シカ	「右後足」他	更新世中期 高尾山層
戸塚区上柏原町	1935	ニホンムカシジカ	右角・右中手骨	更新世中期 羽根ヶ浦層 「上柏原層」
金沢区長浜	1971	アケボノゾウ	下顎臼歯	鮮新世末-更新世前期 上柏原層・下柏原層



※海洋酸素同位体比のステージとは、深海海底コアの解析によるステージで、MIS(Marine Isotope Stage)とよばれる。海底コアの酸素原子の同位体比( $\delta^{18}\text{O}$ )を調べると、古気候が反映され、グラフにすると無数の山谷がみられ、山になっている部分が間氷期、谷になっている部分が氷期を示す。前者の温暖なステージには奇数が、後者の寒冷なステージには偶数が置かれている。



## d~g ドウゴンハゾウ筋・骨

**d** 短齒片(咬板一部)

都筑区東山田

e 上腕骨・環椎

## (緑区川和)

f 第3大臼齒